廃曲〈粉川寺〉考

――結末部の異文をめぐって――

都築則幸

一、はじめに

〈粉川寺〉は、次の梗概を持つ廃曲である。[1]

紀州粉川寺の大法の夜、ある都人が従者と共に寺へ到る。一旦は、能力によって宿を断られるものの、稚児・梅夜叉の情により、都人は梅夜叉の父・高島殿と偽ることで、粉川寺に一宿する。次の日、都人は高野山へと旅立つが、後日再び寺に到り、仮名字の曲舞などを行った後、植杉弾正少弼と実名を名乗り、梅夜叉を伴って帰京する。

〈粉川寺〉の特徴としては諸本による異同が大きく、何度かに亘って改訂が施された形跡が見受けられる点にある。特に、上掛りと下掛りの諸本では、結末部に異文が挿入されることにより、作品の印象が大きく異なる。結末部では、都人が実名にまつわる謡を歌う場面となるが、下掛りでは植杉弾正少弼と都人が名乗り、梅夜叉との旅立ちが描かれるのに対し、上掛りでは、都人が自らの本名字を名乗らないまま、終演を迎える。偽りの名字を騙った都人が、最後に自らの本名を名乗ることは作品の根幹にも関わることであり、上掛りの詞章では結末に違和感を持たざるを得ない。

しかし、現在〈粉川寺〉下掛り節付の最古写本である「吉川家旧蔵車屋本」（以下《吉川小本》とする）は、上掛り系統に列なる詞章を持ち、結末部の異文は、下掛り節付の「菊屋家旧蔵五番綴謡本」（以下《菊屋本》とする）に管見では初めて現れ、それ以後の下掛り諸本の多くにも同様の異文が付随している。

だが、この二本はどちらも共に「車屋謡本」（鳥養道晰の周辺で作られた謡本の一群）に属する諸本であり、表章氏はこの二本の関係について「27（冊目＝私注）に連続する〈粉川寺〉〈舞車〉〈木曽〉や28（冊目＝私注）の〈禅師曽我〉など、▲印（《吉川小本》＝私注）にのみ存する曲はすべてそれ（《菊屋本》＝私注）とほとんど同文である」と述べられている。その上で《菊屋本》は鳥養家伝来本に基づいているとされ、「具体的には道晰の後継者が編纂・

節付に関与して《菊屋本》が成立した」と考察されている。そして「例外的な諸現象も道晰の後継者らの改訂に伴うこととして説明が可能となる」とされている。[2]

「車屋謡本」に含まれている曲の中では、《吉川小本》にある曲が下掛りでは最古であり、さらにその他の「車屋謡本」中、《吉川小本》以外では《菊屋本》と《龍大本》（「龍谷大学図書館蔵写本版本混綴三番綴本」）にのみ収録される曲として、〈舞車〉〈木曽〉〈禅師曽我〉〈正尊〉〈玉井〉〈岡崎〉が挙げられる。[3] しかしこれらの作品は《吉川小本》と《菊屋本》との間に顕著な異同が見られない。〈粉川寺〉のみが例外的な作品として考えられるのである。

だが、何故〈粉川寺〉だけが道晰の後継者らによって例外的な改訂を経なければならなかったのだろうか。この答えを導くには、まず《吉川小本》の〈粉川寺〉がいつ頃、如何なる系統の本を書写したものであるのか突き止める必要がある。そしてさらに、結末部の異文を持つ詞章がいつ頃成立したのか、また、結末部の異文が詞章に挿入されることで、作品全体にどのような効果がもたらされたのか、この二点を考察することによって、道晰の後継者らの《菊屋本》における〈粉川寺〉編纂の意図が推測できると思われる。

しかし〈粉川寺〉に関しては、まだ諸本検討が充分に行われておらず、どのような改訂作業が行われてきたのか、その経緯が明確化されていない。そこで、本稿では〈粉川寺〉諸本の校合作業を行った結果から、「車屋謡本」を中心に〈粉川寺〉にどのような改訂があったのか、その経緯や意図について検討していきたい。[4]

本稿で校合に用いた諸本は以下の通りである。[5]（本稿では、近世初期までに書写されたとされる諸本に対して校合作業を行った。〔　〕にある番号は『国書総目録』に掲載されている番号、〔国未〕は『国書総目録』に未掲載であることを示している。）

第Ⅰ類

①〔上9〕「観世元頼節付本」
東京大学史料編纂所（天文二三～永禄二写）

第Ⅱ類

②〔上17〕「観世元忠宗節節付本」
東京大学史料編纂所（天文二四～天正九写）

⑤〔上31〕「長頼奥書百番本」鴻山文庫（天正頃写）

⑥〔上33〕「室町末期筆観世流本」天理大学（室町末期写）

⑦〔下36〕「鳥養道晰手沢本」（吉川家旧蔵車屋本）
鴻山文庫（天正頃写）

第Ⅲ類

③〔上24〕「堀池宗活節付本並同装本」
東京大学史料編纂所（永禄頃写）

④〔上45〕「室町末期筆薄茶色表紙十行大本「粉河寺」」
観世文庫（永正～天正写）

第Ⅳ類

⑨〔国未〕「室町末期筆紺表紙七行中本「小川（粉川寺）」」
観世文庫（室町末期写）

⑩〔国未〕「龍念寺旧蔵観世流五番綴謡本」

早稲田大学演劇博物館（室町末期写）

⑪〔下59〕「江戸初期節付十三冊本」京都大学（寛永～寛文頃写）

第Ⅴ類

⑫〔下46〕「鳥養道晰本混綴五番綴本」（菊屋家旧蔵五番綴謡本）

法政大学能楽研究所（慶長頃写）

⑬〔外7〕「下掛り横本番外謡本」般若窟文庫（江戸初期写）

⑭〔下61〕「了随三百番本」鴻山文庫（延宝頃写）

その他

⑧〔上51〕「妙庵玄又手沢五番綴本」松井文庫（慶長一～五写）

二、諸本の位置関係

まず「車屋謡本」内の〈粉川寺〉に関して考察を行う前に、〈粉川寺〉諸本がどのような位置関係にあるのか確認する。

初めに、諸本の分類を考えるにあたり、本文異同表を提示する。（本文を引用する際には、引用文の後に底本を表記した。また、用字の相違、助詞の有無など、直接意味内容に関わらない微細な違いは加味せず、最も近い本文を有するものと同等にした。また、便宜を図るため本文異同表には章段数をふったが、章段の構成は資料①に基づいている。）

資料①《構成》（底本：「観世元頼節付本」）

一、［名ノリ］［問答］　粉川寺の住僧（ワキ）と能力（アイ）が登場し、今夜が寺の大法の日であることを告げる。

二、［次第］［名ノリ］［サシ］［下ゲ哥］［上ゲ哥］［着キゼリフ］［問答］　都人（シテ）と従者（ツレ）が現れ、これから粉川寺へ訪れることを告げる。

三、［問答］［問答］　都人一行が粉川寺へ訪れるが、能力に今夜は寺の大法があるため、旅人に宿は貸せないと告げられ、やむなく野宿することを決意する。

四、［□］［問答］［文］［哥］［問答］［問答］　稚児（子方）が登場。一行の姿を哀れに思い、一行の前に文を落とす。文には稚児・梅夜叉の父、高嶋殿と名乗って宿坊に訪れるよう書かれていた。

五、［□］［問答］［問答］［問答］　都人は高嶋殿と偽ることで、一夜の宿を借り受ける。

六、［問答］［上ゲ哥］　寺の住僧から、梅夜叉の兄について聞かれるが、梅夜叉の機転によって難を逃れる。

七、［問答］［上ゲ哥］〈中入〉（間狂言）　梅夜叉と一夜の契りを結んだ都人は、次の日、住僧や梅夜叉に暇乞いをし、高野山へと旅発っていく。

八、［問答］［問答］［問答］［問答］［下ゲ哥］　再び粉川寺を訪れた一行は、梅夜叉への面会を申し出る。

九、［問答］［サシ］［クセ］　すでに以前の嘘は発覚しており、ここで都人は誠の名字にまつわる謡を唄う。

十、［ロンギ］　梅夜叉との相舞。

十一、［一セイ］　都人による舞。

十二、［中ノリ地］　旅立ち。

ただし、《龍念寺本》《京大本》《菊屋本》《了随本》《般若窟本》には十一段と十二段との間に［名ノリ］に準じる段が入る（問題となる結末部の異文）。

本文異同表

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
段	二				四				六		
本文 ／ 諸本	○われいまたかうやさむにまいらす候ほとに此たひおもひたち高野にまいらはやと存候（元）	○ざいしやうは月（元）	※うき身をよ所にゆきなして（妙）	※国をへたて山を見越てもおかまれ給ふ大仏殿（京）	○これ御覧候へ（元）	○いまた申つけす候へ共（元）	△当寺はつとめきやうほうひまなき所にてたやすく御旅人に御宿まいらせす候（宗）	○其かたより（元）	▲なに事にて候そ（妙）	□童形（菊）	
①元　頼本	○	○	×	×	○	○	×	○	×	×	
②宗　節本	△	△	×	×	○	△	×	○	×	×	
③堀　池本	×	△	×	×	○	○	×	○	×	×	
④観　茶本	×	○注	×	×	○	○	×	○	×	×	
⑤長　頼本	△	△	×	×	○	△	△	△	×	×	
⑥天　理本	△	△	×	×	○	△	△	△	×	×	
⑦吉川小本	△	△	×	×	○	△	△注	△	×	×	
⑧妙　庵本	◆	△	※	×	○	◆	◆	○	▲	□	
⑨観　紺本	▲	○注	×	×	×	△	×	△注	▲	×	
⑩龍念寺本	▲	△	※	×	×注	△	×	○	▲	×	
⑪京　大本	▲	○	※	※	×	△	×	○	▲	×	
⑫菊　屋本	○	○	×	※注	○	○	×	○	×	□	
⑬般若窟本	○	○	×	×	○	○注	×	○	×	□	
⑭了　随本	○	○	×	×	○	○注	×	○	×	□	
	△さても我たねんの、そみ候て高野山にまいり候それよりこ川寺へもまいらはやと存候（宗）◆われいまたきしうこ川のくにへほんにまいらす候ほとに只今おもひたちて候（妙）▲さてもたねむの、そみ候て候あひた紀州高野にまいり候それより小川にてまいらはやと存候（観紺）×ナシ	△さいしやうあつき（宗）注・（観茶）は「は」の部分に「あ」と傍記（観紺）は「は月」をミセケチ。「あつき」と傍書する。	×ナシ	×ナシ　注・（菊）では「国」を「海」とする。	×ナシ　注・（龍）では傍記に「是御らん候へ」とある。	△いまた御めにかゝりたる事は候はねとも（宗）◆いまた申たる事は候はね共（妙）　注・（了）（般）では「申付す」を「申返せす」とする。	◆寺中はみなつとめきやうほうひまなき所にて候旅人の御やとはありかたく候（妙）×ナシ　注・（吉）はミセケチ。	△そのたより（長）　注（観紺）では「か」を傍記する。	×ナシ	×ナシ	

22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11
十二	十				八				七		
○雪のゆふ暮（元）	○はなそかし（元）	○御礼申あけうするにて候（元）	○御なさけにより一やをあかしまいらせ候事中々申はかりなく候（元）	○さて〳〵おさなき人はいつくに御座候そ（元）	○や御出めてたう候（元）	○なう〳〵梅夜叉殿はや御立候そ御いとまこひめされ候へ（元）	○此うへはさらは（元）	○あらきよくもなや候（元）	■人にあひつをさして候程に（堀）	○おほせやな（元）	○さん候それは（元）
○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○
△	△	×	△	△	△	△	×	○	×	○	×
△	△	×	▼	○	×	▼	×	×	■	○	×
△	△	×	▼	○注	×	▼	×	×	■	○	×
△	△	●	●	△	△	○	○	○	×	○	×
△	△	●	●	△	△	○	○	○	×	○	×
△	△	×	△	△	△	△	○注	○	×	○	×
○注	○注	●	●	○	◆	×	×	×	×	▲	○
○注	●	●	▲	○	●	×	×	×	×	▲注	▲
△	○	●注	▲	○	●	×	×	×	×	○	▲注
○	○	×	▲	○	●注	×	×	×	×	□	▲
△	○	□	□	×	×	×	×	×	□	□	□
△	○	□	□	○	×	×	×	×	□	□	□
△	○	□	□	×	×	×	×	×	□	□	□
△月の夕くれ（宗）注・「月」と傍記。	△花そなき（宗）●花もなし（観紺）注・（妙）は「かし」に「なき」と傍記。	●今夜のおそれ申へし（長）□今夜の御礼申へし（菊）×ナシ 注・（龍）は「のをそれ申へし」をミセケチ。傍記に「御礼申あけふするにて候」とある。	△御心さしの程いつの世のにかい忘申へき（宗）▼御心さしの程いつの世のにかいわすれまいらせ候へき（堀）●御情により何と申はかりなく候（長）▲御情により一夜をあかし候事なにと申はかりもなく候（龍）□御憐れみにより一夜を明させ給ふ事生々世々ゑ申ましく候（菊）	△已前のおさなき人はいつくにわたり候そ（宗）×ナシ 注・（観茶）は「いつくに」を「これに」とする。	△こなたへ入申候へやこなたへ御いて候へ（宗）◆めてたの御くたりやこなたへ御座あらふするにて候（妙）●あらめてたの御くたりや候（観紺）×ナシ 注・（京）は「御くたり」を「御事」にする。	△いかに梅夜叉殿はや御帰り候（宗）▼いかに梅夜叉殿高嶋殿の御帰り候（堀）×ナシ	×ナシ 注・（吉）はミセケチ。	×ナシ	□人と相図の子細の候程に（菊）×ナシ	▲御ちやうやな（妙）□御事や（京）注・（観紺）は「ちやう」に「仰」と傍記。	▲さん候いてそれは（観紺）□あふそれは（菊）×ナシ 注・（龍）は「いて」の部分に「あふ」と傍記する。

異同表1、6、19から〈粉川寺〉諸本は大まかに五系統で分けられる。ここではその分類基準を明確化するため、類型ごとに特徴をまとめる。

第Ⅰ類　①《元頼本》

〈粉川寺〉を収録する謡本の中では最古の写本。諸本中、最も長大な詞章。第Ⅱ類以下の諸本の詞章とは基本的に類似を見せるが、［問答］は他の諸本に比べ長くなる傾向があり、他本に存在しない詞章も多い（表17、19）。また［ロンギ］や［中ノリ地］での異同は《妙庵本》への影響を示唆している。（表21、22）

第Ⅱ類　②《宗節本》、⑤《長頼本》⑥《天理本》⑦《吉川小本》

「車屋謡本」である《吉川小本》を含んだ諸本群（表1、6、14、15、17、18）。《元頼本》に見られた冗長な［問答］が削除、改訂されているのが特徴。《宗節本》は《長頼本》《天理本》《吉川小本》の親本にあたり、《元頼本》や《堀池本》などとの関係が見出せる箇所がある（表7、8）。この《宗節本》と《長頼本》《天理本》《吉川小本》との関係は後述する。また表6、20から第Ⅳ類への影響、表22から第Ⅴ類への影響が示唆される。

第Ⅲ類　③《堀池本》④《観茶本》

第Ⅱ類と同じく、《元頼本》の［問答］が削除、改訂された詞章を持つが、第Ⅱ類とは違った詞章を持つ諸本群（表1、16、17、18、19）。特に《宗節本》とは近い詞章を有しているため、兄弟関係が窺える（表8、20）。また表6、13、17から第Ⅴ類への影響、表8、18から第Ⅳ類への影響が示唆される。

第Ⅳ類　⑨《観紺本》⑩《龍念寺本》⑪《京大本》

第Ⅰ類～第Ⅲ類までの影響を受けて成立した諸本群（表1、4、9、11、17、19）。特に《龍念寺本》や《京大本》には結末部の異文が見られ、第Ⅴ類との密接な連関が考えられる。さらに他の詞章でも、表3から《妙庵本》と《龍念寺本》《京大本》との関係、表4から《京大本》と《菊屋本》との関係が指摘できる。また、このグループの諸本には傍記が多く、第Ⅰ類～第Ⅲ類までのいずれかの諸本と校合した結果が傍記に示されている（表2、5、8、12、20、22）。

第Ⅴ類　⑫《菊屋本》⑬《般若窟本》⑭《了随本》

第Ⅳ類からの改訂作業の結果（この点については後述する）、結末部の異文を持つ下掛り節付の〈粉川寺〉が確立した諸本群（表10、11、12、13、19、20）。結末部の異文においても、第Ⅳ類との異同が見られる。

その他　⑧《妙庵本》

第Ⅱ類と第Ⅳ類との中間に属するものとして《妙庵本》が挙げられる。表7、19から第Ⅱ類《長頼本》などとの関係が指摘され、さらに表3、9、12、21、22から第Ⅳ類との関係が指摘できる。特に、表21では《妙庵本》から第Ⅳ類以降の詞章に異同が生じており、また、表22では第Ⅳ類の中で異同が生じている。これらは《妙庵本》にて記された二種類の詞章による影響と推測される。

以上が本文異同からの諸本分類である。本文異同と書写年代から〈粉川寺〉の原態を考えるに、原態に一番近い本文は第Ⅰ類であったと推測される。そして、この第Ⅰ類の「問答」の削除を主に、第Ⅱ類、第Ⅲ類への改訂が行われる。これが第一段階の改訂である。

そして次に結末部の異文挿入を主として、第二段階の改訂、第Ⅳ類への改訂が行われる。その際に着目すべきは《妙庵本》の存在である。表1や17にあるように、《妙庵本》の詞章は、第Ⅱ類と第Ⅳ類との詞章が混在するものとなっている。《妙庵本》の詞章が示す通り、第Ⅳ類の詞章は主に第Ⅱ類の詞章を受け継ぐ形で徐々に改訂が行われたと考えられるのである。また第Ⅳ類から第Ⅴ類へは、結末部の異文をも含んだ全体の詞章整備が施され、ここに下掛り節付〈粉川寺〉の詞章が確定されるのである。

ここまでの考察から、諸本の位置関係は資料②のように図示される。

資料②　諸本系統図

三、「結末部の異文」と「車屋謡本」

〈粉川寺〉第Ⅱ類は結末部の異文挿入を主として、第Ⅳ類へと改訂されていく。よって、同じ「車屋謡本」であっても、第Ⅱ類の《吉川小本》と第Ⅴ類の《菊屋本》との詞章の間にはかなりの相異が見られる。しかし、この両者は本来ほぼ同一の詞章を持つと指摘されている。この結論の差は、一体如何なる点からもたらされたものであろうか。次に、〈粉川寺〉における《吉川小本》と《菊屋本》、両者の関係について考えていきたい。では、まず《吉川小本》の〈粉川寺〉詞章の性格について見ていこう。

《吉川小本》に関しては、表章氏が詳細に述べられている。[6]《吉川小本》の〈粉川寺〉は「文の部分など、線引等による文句改訂がかなりあり」、「下掛りの謡本として最古の地位を占めている曲」と指摘されている。また《吉川小本》所収曲に関して「他の車屋謡本の揃本には含まれていない稀曲・珍曲がすこぶる多い」と述べられており、結論として《吉川小本》の〈粉川寺〉は「道晰の稀曲蒐集のために集められた曲であり、元々の本文自体、上掛り・下掛りの区別なく蒐集されたもの」とされている。

さらに、道晰の〈粉川寺〉謡本の入手経路についても、『言経卿記』文禄五年（一五九六年）六月九日の記事によって、道晰が山科言経から〈粉川寺〉謡本を借り受けたことが指摘されている。また、表氏はこの言経が所持していた謡本を「観世流の本が主体であった」とされ、「金春流の節付に変えて写しているものの、その詞章が本来は観世系統である曲が混じっていることは間違いあるまい」、「《吉川小本》所収の稀曲のほとんどが先行する金春系謡本の伝存しない曲である事実からも、確実視される」と指摘されている。

《吉川小本》の〈粉川寺〉が言経の所持していた観世流の本を底本に書写されたものであるとすれば、この《言経本》はいかな

るものであったのだろうか。〈吉川小本〉の〈粉川寺〉には線引による文句改訂が指摘されているが、この点から次のことが考えられる。

①線引が行われる前の詞章を持つ謡本があったということ。

②さらに線引をするために参考とした校合本があったということ。

この二点が〈言経本〉の形態の手がかりとして示唆される。本文異同表から①の系統の謡本として有力なのが〈長頼本〉もしくは〈天理本〉である。〈吉川小本〉では何ヶ所かに亘って線引による文句改訂が見当たるが、表7から〈吉川小本〉の墨滅詞章を持つ謡本は〈長頼本〉もしくは〈天理本〉のみである。また、その他の詞章部分でも〈長頼本〉や〈天理本〉は〈吉川小本〉に酷似している。以上から見て、第一段階として道晰が書写した本は第Ⅱ類の〈長頼本〉もしくは〈天理本〉と同系統のものということになろう。

さらに、②の校合本として考えられるのが〈宗節本〉である。本文異同表から〈宗節本〉の詞章は〈吉川小本〉の線引部分を除いた形と似ていることが指摘できる。例えば、表14の第Ⅱ類の諸本はすべて同じ詞章をもっているため、〈吉川小本〉で線引が行われないが、表15の〈宗節本〉だけ詞章が見られない場合には、〈吉川小本〉で線引が行われていることが分かる。また表16や19などで例外的に詞章が〈長頼本〉や〈天理本〉に従わず、〈宗節本〉の詞章に従っていることも〈宗節本〉との関係が密であることの証明である。さらに、傍書として〈吉川小本〉には「さらは面白き謡の候程に其時名乗候へし」という詞章があるが、この詞章は〈宗節本〉にしかないため、〈宗節本〉系統の本による校合作業があったことを示唆する。

道晰と言経との関係を考えるに、道晰は〈粉川寺〉に関して、稀曲蒐集を目的に二種類の謡本を、おそらくは共に言経から借り受けたと見られる。その際も、まずは〈長頼本〉系統の謡本を借用し、全詞章を書写した後、〈宗節本〉系統の謡本で線引による文句改訂を行ったと推測される。

以上が〈吉川小本〉の〈粉川寺〉に想定される成立過程である。しかし、この時点での〈粉川寺〉謡本はすべて上掛りのものであり、結末部の異文を含んだ下掛り節付の〈粉川寺〉謡本はまだ見出せない。では、〈吉川小本〉とほぼ同一の詞章を持つとされる〈菊屋本〉は一体、如何なる系統の謡本を書写したのであろうか。また、そもそも結末部の異文を持つ〈粉川寺〉はいつ頃成立し、どのような編纂意図で道晰の後継者らはその詞章を取り入れたのであろうか。次に、この二点について考察したい。

〈菊屋本〉は、まず結末部の異文から第Ⅳ群の〈龍念寺本〉や〈京大本〉の系統の影響を受けて成立した謡本であることが推測でき、特に本文異同表4、12から第Ⅳ類〈京大本〉との近似的関係が指摘できる。ここで着目すべきは〈龍念寺本〉の存在である。〈龍念寺本〉は上掛り節付であるのにも関わらず、結末部の異文を有している。しかし、同じ第Ⅳ類上掛り節付の〈観紺本〉には結末部の異文がない。ここに結末部の異文に関する改訂作業が窺える。結末部の改訂は上掛り系統に属する何者かの手によっ

て行われたと考えられるのである。《龍念寺本》の時点で、上掛りの節付を持ち、さらに結末部の異文を有する〈粉川寺〉が成立するわけだが、さらにこの異文が下掛り節付の詞章として取り込まれていったことが《京大本》から推測できる。

では、この改訂はいつ頃行われたのであろうか。まず、道断が《吉川小本》を書写した時期に、結末部の異文を持つ詞章が存在していたのか考えてみたい。ここで仮に、道断が稀曲蒐集を行った時点で、すでに結末部の異文を持つ〈粉川寺〉が下掛りの謡本中に存在していたとする。この場合、《吉川小本》の〈粉川寺〉は上掛りの謡本から詞章のみを書写し、節付だけを下掛りに直した本であるため、道断はわざわざ下掛り謡本の〈粉川寺〉を避けたと解釈せざるを得なくなる。しかし、それは不自然である。むしろこうしたことは、自流の謡本に適当なものがなかった場合の便法として行われるのが普通である。

この点から《吉川小本》の〈粉川寺〉が書写された時点では、結末部の異文を有する下掛り節付の〈粉川寺〉は存在していなかったと考えられるのではないだろうか。以上のことから結末部の異文を有する下掛り節付の〈粉川寺〉が制作された時期を探ると、道断が《吉川小本》の〈粉川寺〉を書写したとされる文禄五年（一五九六年）以降と推測される。

また、上掛りで結末部の異文を持つ《龍念寺本》の具体的な書写年代は不明だが、[7] 本文異同表3から《龍念寺本》と《京大本》が《妙庵本》にしか見られない詞章を取り込んでおり、さらに《龍念寺本》が《京大本》よりも早く成立している事情から、《妙庵本》が成立した慶長二年（一五九七年）以降、《京大本》の成立時期である寛永以前が改訂作業の行われた時期として設定できる。よって、上掛り節付で結末部の異文を有する〈粉川寺〉が書写されるのは慶長～寛永（一五九六～一六四三年）までの間と考えられる。

そして、結末部の異文が下掛り節付として取り込まれるのは、《京大本》の書写年代が寛永～寛文（一六二四～一六七二年）の頃であり、《菊屋本》の書写年代についても表氏が「寛文以前の写本であることが確実と思われる。寛永までさかのぼる可能性もあろう」と指摘されていることから、[8] 寛永～寛文（一六二四～一六七二年）までの頃と推測できる。

だか、何故この結末部の異文が主に下掛り系統の謡本に継承されていったのであろうか。〈粉川寺〉結末部の異文には都人の実名の名乗りがあるため、異文のない詞章よりも作品全体に安定感が見られる。作品の安定感とは次のようなことである。

梅夜叉のついた嘘（都人が偽りの名字、高嶋殿を名乗ること）が発覚する・梅夜叉は寺の大法を破った罰として折檻される危機にさらされる（間狂言）・都人が再び粉川寺を訪れ、自らの身分を明かすことで、梅夜叉の窮地を救う（結末部の異文）・都人と梅夜叉は共に粉川寺から旅立っていく

結末部の異文は作品の根幹に関わっている。都人が実名を名乗らない詞章では曖昧な印象が生じ、作品の安定感に欠けるのである。元々、下掛りに〈粉川寺〉という能がなかったこと、結末部の異文を持つ詞章が作品に安定感をもたらすこと、この二点が下

掛り系統に結末部の異文を持つ詞章が取り込まれていった原因として考えられる。このため道晰の後継者らは《菊屋本》の〈粉川寺〉に《吉川小本》の詞章を取り入れず、《龍念寺本》や《京大本》などの詞章を取り入れたと推測されるのである。

四、「結末部の異文」と「男色」

しかしながら、〈粉川寺〉結末部の異文は単に安定感だけを作品にもたらしたのであろうか。ここに〈粉川寺〉と同様、旅の者と少年とに男色関係が指摘でき、また結末において二人の旅立ちが描かれる作品として、謡曲〈花月〉がある。次に〈花月〉との作品比較を通して、再度どのような意図から〈粉川寺〉結末部の異文が生じてきたのか考えたい。

〈花月〉の登場人物である花月（シテ）、旅の僧（花月の父・ワキ）、門前の者（アイ）との関係に男色を指摘した論として詳細なものに、徳江元正氏の「「花月」考」がある。[9] 徳江氏は、「濃厚な独特のエロティシズム」を「花月とアイの門前、あるいは、シテの花月とワキの父親といった、人間関係においても嗅ぎ取ることができよう」と述べられている。そして、喝食・花月の経済的な面を担当するマネージャー、または念者、年長の金剛としての存在が、「花月」のアイであるとされ、花月の父を名乗る旅の僧は、真実の親なのかも分からず、花月の「友達」であった清水寺門前の者から、やはり男色の対象として花月の身柄を買得したと述べられているのである。[10]

〈花月〉における旅の僧と花月との関係は、〈粉川寺〉での都人と梅夜叉との関係に類似する。〈粉川寺〉では「一夜の契り夢うつつ」と端的に都人と梅夜叉との男色関係を示す。また結末部の異文において、都人は植杉弾正少弼と本名を語るが、これはあくまで自称であり、その素性は知れない。しかし、最終的にはその都人と共に梅夜叉は旅立ちを迎えるのである。ここに男色恋愛譚として〈花月〉との類似が見られる。

しかし、この結末部の異文は元々の作品設定を考慮せずに増補されたため、話の構造に歪みが生じている。そもそも花月は徳江氏に「童形の垂髪であり、このすがたは終生不変のものであるから、当然、売色という行為を伴うことにもなる。金剛―男色関係の兄分の「友達」に誘られている昨日今日、喝食の花月に夢のような華やかな将来への見取図もあり得まい」と指摘されている。花月は身分として最底辺に属する芸能民なのである。

だが、梅夜叉の身分はそうではない。梅夜叉は都人に自分の父の名を騙らせることで、寺の大法を不問にさせた。これは父の高嶋殿と共に、梅夜叉自身、高貴な立場であったことを推測させる。この梅夜叉に対し、粉川寺の住僧は最大限の配慮をもって管理する責務があるはずであり、ましてや素性の知れない植杉弾正少弼と名乗る者に、梅夜叉との旅立ちが簡単に許可されるとは考えにくい。だが、結末部の異文が挿入されることで、都人と梅夜叉、二人の旅立ちが描かれる。これは〈粉川寺〉において、都人と梅夜叉、二人の男色恋愛譚の様相がより鮮明化されたことを示唆している。結果、結末部の異文は〈粉川寺〉全体の構造に歪みをもたらしてはいるものの、物語全体における男色的要素の強化

には成功しているのである。この「男色的要素の強化」に異文の特質が窺えると考えられる。

では、何故このような結末部の異文が生じたのであろうか。結末部の異文が生じた、その時代背景について考えてみよう。結末部の異文を有した詞章が生じ、諸本に取り込まれていった時期は、慶長～寛文（一五九六～一六七二年）の頃であろうと指摘した。この間、寛永期には若衆歌舞伎が爆発的な流行を見せ、また承応元年（一六五二年）の若衆歌舞伎禁止以後も、明暦・延宝を経て、野郎歌舞伎が寛文期に最盛期を迎える。この時期には男色文化が隆盛を極めたのである。寛永期に成立した仮名草子『田夫物語』には、

さりながら今時は若衆歌舞伎といふことをし出だし、出家のみならず俗も多く好きて、あまたの金銀を費やし、財宝を失ふこと、定めて御存じなるべし。

（日本古典文学全集『仮名草子集』に拠る）

と記述され、当時の人々が如何に若衆や男色に入れ込んでいたのか理解される。

このような時代背景は、元々男色の物語として存在していた〈粉川寺〉にも影響を与えたと推測される。〈粉川寺〉改作者は、異文のない詞章では稀薄だった「男色的要素の強化」を目的とし、当時の人々の趣向に合うよう詞章の改訂を施した。その結果生じたのが、結末部の異文であったのだろう。

また、道晰の後継者らによる《菊屋本》編纂の意図にも男色流行の時代背景が多少なりとも影響したのではないかと考えられる。表氏は「《菊屋本》は多くの曲の詞章が他の車屋謡本と同じく、車屋謡本系には相違ないものの、一部には江戸初期の能界の実態に近づけて車屋謡本独自の色彩の薄まっている曲も含まれている」と述べられている。[11] 道晰の後継者らは当時の人々の趣向を汲み取り、敢えて「車屋謡本」である《吉川小本》の〈粉川寺〉ではなく、改訂された男色の色彩の強い詞章を持つ〈粉川寺〉を《菊屋本》編纂に取り入れたのではないかと推測されるのである。

五、おわりに

本稿では、〈粉川寺〉諸本の位置関係を明らかにすることで、結末部の異文がいつ頃成立したのか推測し、その異文の成立背景や改作意図について考察を行った。特に、結末部の異文は主に下掛り諸本で認められるが、〈粉川寺〉下掛り節付の最古写本である《吉川小本》は、上掛り諸本の詞章を有しているため、まず《吉川小本》における〈粉川寺〉の特性について言及した。そして《吉川小本》の〈粉川寺〉が《長頼本》や《宗節本》などといった系統の謡本からの書写であることを突き止めた。しかし、このことは同じ「車屋謡本」であり、また本来ほぼ同一の詞章を有しているはずの《菊屋本》との関係に問題を生じさせた。《菊屋本》の〈粉川寺〉は《龍念寺本》や《京大本》などの改訂過程を踏まえて成立しており、《吉川小本》の〈粉川寺〉とは関係が見られないのである。この点から《菊屋本》編纂に関わった道晰の後継者らは、謡本編纂に際し、「車屋謡本」に執着することな

く、かなり広範囲から様々な謡本を探し出してきたと推測される。単に鳥養家伝来本を忠実に書写するのではなく、主体的に謡本を編纂する道断の後継者らの姿が窺えるのである。今後、より明確に《吉川小本》と《菊屋本》との関連を指摘するためには、両者に所収される〈舞車〉〈木曽〉〈禅師曽我〉〈正尊〉〈玉井〉〈岡崎〉の各曲について、主要謡本をも含んだ比較調査が必要になると思われる。

また、結末部の異文を有する〈粉川寺〉と〈花月〉とを作品比較し、元々の詞章には稀薄だった男色的要素が異文によって強化されたことを指摘した。さらに、結末部の異文を持つ詞章の成立時期が慶長～寛文（一五九六～一六七二年）の頃と見られることで、結末部の異文の成立背景が当時の男色の趣向にあると推測した。本稿では江戸初期における男色の流行が、どのように謡曲へ影響を与えたのか、わずかながらもその一側面に光を当ててみた。男色の流行が謡曲に影響を与えたこのような例は、他にも存在すると思われる。例えば、〈岡崎〉にも男色的要素が見出せる。〈岡崎〉では、岡崎の一子が家臣の忠広に神前の桜を一枝折ってくるよう命じる。当然、桜の枝を折る行為は禁忌であるが、岡崎の一子はそれを承知の上で、忠広に桜の枝を折ってくるよう命じるのである。この岡崎の一子の行為は、忠広に対して、自分への愛情を秤に掛けさせる行為とも解釈できる。ここに、二人の男色関係が読み取れるのである。ただし、その要素は稀薄である。しかし、近世初期の諸本群の中には、こうした男色的要素が従来の詞章より色濃く強調されているものもあるのではないだろうか。今後も男色の流行という契機が謡曲にどのような影響を与えたのか検討を重ねていくことが必要である。

注（1）　上演記録としては、『親元日記』文明九年（一四七七年）正月十三日の観世演能があり、『言継卿記』天文二十二年（一五五三年）六月十四日、永禄九年（一五六六年）六月二十五日には八田太夫が演能したことが知られている。しかし、成立年代や作者に関しては不明な点が多い。作者に関しては、『能本作者註文』や『歌謡作者考』（ともに「増補国語国文学研究史大成8『謡曲　狂言』」）、「いろは作者註文」（『青山語文』八号）などで、「作者未詳」とされ、唯一作者が指摘されている『自家伝抄』（『能　研究と評論』八号）では、「宮増」が作者として挙げられている。

（2）　表章「『車屋謡本』新考（七）――第二章　鈔写車屋謡本（その六）――」（『能楽研究』第二一号　一九九六年）

（3）　表章「『車屋謡本』曲名一覧表」（『能楽研究』第十七号　一九九二年）

（4）　〈粉川寺〉には甲類と乙類の二種類があるが、この二つは直接関係のない同名異曲。『未刊謡曲集27』所収曲は乙類である。本稿では甲類のみを扱う。

（5）　〈粉川寺〉には、「寺」を除いた〈粉川〉という名称で題が示される場合がある。題に〈粉川〉と示しているのは《元頼本》《堀池本》《吉川小本》《観紺本》の四本である。〈粉川〉という名称は古い写本に多く見られ、〈粉川寺〉という名称は比較的新しい写本に見られる。近世期の諸本には〈粉川寺〉という名称しか見られず、この時期には〈粉川寺〉という名称が確定したようである。よって、〈粉川寺〉の古名は〈粉川〉であったと推測される。

（6）　表章「『車屋謡本』新考（三）――第二章　鈔写車屋謡本（その二）――」（『能楽研究』第一四号　一九八八年）

（7）　竹本幹夫監修による『貴重書　能・狂言篇』（「早稲田大学演劇博

物館所蔵特別資料目録5」早稲田大学坪内博士記念演劇博物館　一九九七年）によると〈龍念寺本〉は室町後期以降、江戸初期以前の書写とされる。

（8）注（1）参照。

（9）徳江元正『室町芸能史論考』（三弥井書店　一九八四年）「第二章　能・Ⅰ　八　「花月」考」

（10）注（9）の論考に言及したものとして、細川涼一「稲垣足穂と「花月」」（『文学』第一巻・第六号　二〇〇〇年）がある。

（11）注（1）参照。

付記　本稿を成すにあたっては、法政大学能楽研究所、早稲田大学演劇博物館をはじめ、数多くの諸機関各位より貴重な資料を閲覧させて頂きました。深謝申し上げます。

新刊紹介

藤平春男著

『藤平春男著作集第五巻』

一九九七年の刊行開始から六年。今回、藤平春男先生の著作集が、第五巻の刊行をもって遂に完結することとなった。

本巻の副題「和歌史論集」は、藤平先生が生前に出版を計画しておられた新著の題名である。その構想が記されたメモを参考に、これまでの単行本・著作集には未掲載の論文を中心にして本巻は編集された。

第一章「和歌史研究の諸問題」には、和歌史の諸問題に関する論考が収められている。「短歌論」から「近世和歌研究」「窪田空穂研究」に至るまで、多彩なテーマにおいて自在に論が展開し、藤平先生の見識の広さに感じ入る。また、後半の第二章には随想・対談・書評等が収録されており、先生の新たな一面を垣間見ることもできるのではないだろうか。なお、巻末には、年譜・著作目録・総目次・索引が付されている。

著作集全五巻の完成により、藤平先生の研究業績の全貌が明らかになった。同時に、先生の偉大性が改めて確認されたのは言うまでもない。これからの時代、研究を志す者にとっては必携の書である。

（二〇〇三年二月　笠間書院　A5判　五七五頁　一三〇〇〇円）　〔錺　武彦〕